



## 鉄器の導入と社会の変化 - 北海道 -

三浦 正人（財団法人北海道埋蔵文化財センター）

北海道の鉄器の初源期は続縄文文化期前半（弥生時代にほぼ相当）である。現在のところこの時期の鉄器出土遺跡は多く見ても20ヵ所に満たない。骨角器にみられる鉄製利器による加工痕を含めてもまだ、極めて少量の鉄器が使用されていたに過ぎないと言える。鉄器の出土はほとんどが墓からと限定されている。

7～8世紀の続縄文時代末期の北大期になると土師器文化の影響を受け、石狩低地帯を中心とした道央圏で、東北地方末期古墳の副葬品と共通する太刀・蕨手刀・小刀・刀子・鎌・斧・針・鑢子などが、土坑墓に土器とともに副葬されるようになる。相前後して擦文文化が成立する。

擦文文化期前葉の9世紀前半には北海道式古墳も築造され、同時期の土坑墓ともども多量の鉄器が副葬される。鉄製鍬先も登場し古墳の築造にも使用されている。北大期を含めて8世紀後半から9世紀前半のこの道央圏の状況が、交易のよるものか戦闘体制を反映するものかは検討を要するが、大きな社会変化をもたらされたのは確かで、擦文文化成立もこの事象によるところが大きいと思われる。

ところで、北海道では5～9世紀にオホーツク海沿岸を中心に道東部や日本海側の海岸線にオホーツク文化が広がる。特に道東部海岸沿いには北方からの民族が定住し、墓の副葬品や住居の出土品から見て豊富な種類と量の金属器文化を展開する。この文化は続縄文後半期や擦文文化と互いに影響しながら擦文文化に融合され、アイヌ文化の礎となる。鉄・銅・錫などの金属製品については、それぞれが供給元なのか供給先なのかは検討が必要だが、北方地域との交易・融合という点で多大な影響をもたらした社会変化を引き起こしたといえる。

9～10世紀以降の擦文文化期では、住居内での鉄器の発見例が主体となり、種類も刀・刀子・鎌・鍬・斧・針の一般的なものに加え、紡錘車・鉤状魚獲具や鉄製帯飾りも出土し、刀子の形状も用途別にか多様になる。金属学的解析からも指摘されるごとく、東北地方から製品とともに供給される鋼や銑鉄をもって鍛冶が行われていたことも、鍛冶遺構や鉄滓・鍛造剥片などの検出やフイゴ羽口・素材となる棒状鉄などの出土から明らかである。刀子や鉤状魚獲具などに自家製品と思われるものも多くなる。東北地方の生産地からの製品や素材の供給は交易によるものであり、交易権や集落内の鍛冶の有無が集落間の社会的階層や勢力状況・集団内での個人の地位・畑や漁獲などの生産活動に大きな影響を与え、社会変革が起きたに違いない。

北海道における鉄器導入の問題は東北・北陸地方との交易や交流、オホーツク文化を含めた北方との関わりといった汎日本海・オホーツク海的な広範囲の体系のなかで考える必要がある。





